古高ドイツ語 Isidor における属格付加語の位置(2)[18]

下　嵜　正　利

3. $_1$名詞句が複数語からなり$_2$名詞句が１語から成る場合（43例）

3.1. $_1$名詞句が名詞 ＋ 分詞句、$_2$名詞句が名詞（２例）

$_1$名詞 ＋ $_1$分詞句
↑
$_2$名詞

A. $_2$名詞－$_1$名詞－$_1$分詞句（２例）

a) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞－$_1$分詞句（１例）

druhtines uuort zi nathane quhedendi (uerbum domini ad nathan dicens) (618)

b) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞－$_2$分詞句（１例）

Truhtines stimna geldenti uuidarloon sinem fiantum (Uox domini reddentis retributionem inimicis suis) (60)

原文では分詞句は domini を修飾しているが、訳文では stimna を修飾する形になっている。

3.2. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ 数詞、$_2$名詞句が名詞（１例）

$_1$定冠詞 ＋ $_1$数詞
↑
$_2$名詞

[18]「古高ドイツ語 Isidor における属格付加語の位置(1)」は、『山口大学独仏文学第35号』(2013) 所収。

A. $_1$定冠詞－$_1$数詞－$_2$名詞（１例）
a) 原文は$_1$数詞－$_1$名詞（１例）
dhea sibunzo uuehhono (LXX ebdomadę) (453)

この属格は部分属格である。原文では数詞が形容詞的に名詞を修飾する構造になっているが、数詞の後に名詞が続く語順は共通している。

3.3. $_1$名詞句が定冠詞を持たない数を表す名詞句[19]、$_2$名詞句が名詞（２例）

$_1$定冠詞を持たない数を表す名詞句
↑
$_2$名詞

A. $_1$定冠詞を持たない数を表す名詞句－$_2$名詞（２例）
この属格は、部分属格である。
a) 原文は$_1$数を表す形容詞句－$_1$名詞（１例）
zehanzo endi feorzuc uuehhono (CXL ebdomade) (463-464)

原文では、CXL が形容詞的に名詞を修飾しているという違いはあるが、対応する句の順序は同一である。

b) 原文は、$_1$名詞－$_1$数を表す形容詞句（１例）
eines min dhanne fimfzuc iaaro (annos XL et VIIII) (460-461)

この例も原文では、XL et VIIII が形容詞的に名詞を修飾しているが、こちらは対応する句の順序が逆である。

3.4. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が名詞（19例）

$_1$定冠詞 ＋$_1$名詞
↑
$_2$名詞

[19]古高ドイツ語の zehanzo endi feorzuc、ラテン語の CXL 及び XL et VIIII は、どれも複数語として扱った。

A. $_1$定冠詞－$_2$名詞－$_1$名詞（15例）

a) 原文は$_2$名詞－$_1$名詞（２例）

dhemu gotes nemin (dei uocabulo) (292), dher naues sunu (naue filius) (528-529)

定冠詞の存在を別にすれば、$_2$名詞－$_1$名詞といいう順序は原文と共通している。

b) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞（６例）

dhemu druhtines nemin (persona…domini) (279-280), dhea christes fiant (inimici christi) (428), dheru christes passione (passionem…christi) (475-476), dheru iesses uurzun (radice iesse) (661), dhiu iesses uurza (radix iesse) (704-705), dhiu iesses uurza (radix iesse) (707)

c) 原文は$_1$指示代名詞－$_1$名詞－$_2$名詞（１例）

dher uuerodheoda druhtin (ille dominus exercituum) (215-216)

d) 原文は$_1$名詞－$_2$人称代名詞（１例）

dhea christes chumft (aduentus eius) (437)

e) 原文は$_1$名詞－$_1$形容詞－$_2$人称代名詞（１例）

dhemu christes berghe (monte sancto eius) (699)

f) 原文は主語の$_1$名詞ａ－述語名詞の$_1$名詞ｂ（１例）[20]

dheru christes lyuzilun (paruolus…christus) (391-392)

この箇所は、原文を大きく補足するとともに、異なった構造で訳出している。原文の$_1$名詞ａは訳文の$_1$名詞に、原文の$_1$名詞ｂは訳文の$_2$名詞に対応している。

g) 原文との語順の比較が不可能な例（３例）

dhazs gotes tempil (477), dher naues sunu (544), dheru christes chiriihhun (684)

---

[20]この名詞句を含む文全体は、次の通りである。
Meinida dher forasago chiuuisso in dheru christes lyuzilun, huuanda ir uuas uuard chiboran, nalles imu selbemu. (Paruolus enim christus, quia homo et natus nobis, non sibi.)

B. $_1$定冠詞－$_1$名詞－$_2$名詞（４例）

a) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞（２例）

dhemu nemin cyres (persona…cyri) (162), dhea einnissa gotes (unitatem deitatis) (303)

原文も訳文も、$_1$名詞句－$_2$名詞句の順である。

b) 原文は$_2$名詞－$_1$名詞（１例）

dher rehtuuisigo manno (hominum iustus) (271-272)

この属格は部分属格である。

この名詞句は、同格の名詞句を持ち、それは原文では前に（dominator fortis israel hominum iustus)、訳文では後に置かれている（dher rehtuuisigo manno uualdendeo strango israhelo)。属格名詞句の位置も同格名詞句の位置も、原文とは異なっている。

c) 原文との語順の比較が不可能な例（１例）

dher angil gotes (444)

3.5. $_1$名詞句が形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が名詞（４例）

$_1$形容詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$名詞

A. $_1$形容詞－$_2$名詞－$_1$名詞（３例）

a) 原文も$_1$形容詞－$_2$名詞－$_1$名詞（１例）

allem sundono chunnum (omnibus uitiorum gentibus) (538)

b) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞（１例）

allem gotes sunim (filios dei) (54)

c) 原文との語順の比較が不可能な例（１例）

andrem gotes chiscaftim (492-493)

B. $_1$名詞－$_1$形容詞－$_2$名詞（1例）

a) 原文も$_1$名詞－$_1$形容詞－$_2$名詞（1例）

uualdendeo strango israhelo (dominator fortis israel) (271-272)

形容詞が名詞の後に置かれていることも含め、原文と語順が一致している。

この名詞句全体は、3.4.B.b）の dher rehtuuisigo manno (hominum iustus) (271-272) を同格名詞句として持っているが、これとの位置関係は、上述のように、原文と異なっている。

3.6. $_1$名詞句が形容詞 ＋ 名詞 ＋ 分詞句、$_2$名詞句が名詞（1例）

$_1$形容詞 ＋ $_1$名詞 ＋ $_1$分詞句

↑

$_2$名詞

A. $_2$名詞－$_1$名詞－$_1$形容詞－$_1$分詞句（1例）

a) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞－$_2$形容詞（現在分詞）（1例）

gotes stimna hluda in sinaberge quhedhenda (uocem dei intonantis) (255-256)

原文では、intonans は deus を修飾しているのだが、その訳語にあたる hlūt は、got ではなく stimna を修飾している[21]。

3.7. $_1$名詞句が副詞 ＋ 形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が名詞（1例）

$_1$副詞 ＋ $_1$形容詞 ＋ $_1$名詞

↑

$_2$名詞

[21]当該名詞句を含む文全体は、次の通りである。

bidhiu huuanda sie chihordon gotes stimna hluda in sinaberge quhedhenda: … (quod in monte sina uocem dei intonantis audierint: …)

原文では、in monte sina は audierint と結びついているのだが、訳文では chihordon ではなく、原文には無い現在分詞 quhedhenda と結び付けられている。

A. $_1$副詞－$_1$形容詞－$_2$名詞－$_1$名詞（1例）
a) 原文との語順の比較が不可能な例（1例）
so daucgal fater chiruni (102–103)

3.8. $_1$名詞句が数詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が名詞（1例）

$_1$数詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$名詞

A. $_1$数詞－$_2$名詞－$_1$名詞（1例）
a) 原文は$_1$数詞－$_1$名詞－$_2$名詞（1例）
sibun iaaro uuehhon (VII ebdomadas annorum) (459)

3.9. $_1$名詞句が形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が人称代名詞（1例）

$_1$形容詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$人称代名詞

A. $_1$形容詞－$_2$人称代名詞－$_1$名詞（1例）
a) 原文は$_1$形容詞－$_1$名詞－$_2$人称代名詞（1例）
al iro meghin (omnis uirtus eorum) (279)

3.10. $_1$名詞句が所有代名詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が selb（1例）

$_1$所有代名詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$selb

A. $_1$所有代名詞－$_2$selb －$_1$名詞（1例）
a) 原文は$_1$形容詞－$_1$名詞（1例）
sineru selbes stimnu (propria uoce) (335)

proprius が sin selbes で訳されている。被修飾名詞は共に後に置かれている。

3.11. $_1$名詞句が所有代名詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が前方照応的な指示代名詞（1例）

$_1$所有代名詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$前方照応的な指示代名詞

A. $_1$所有代名詞－$_1$名詞－$_2$指示代名詞（1例）
a) 原文との語順の比較が不可能な例（1例）
siniu zeihhan dhes (signa eius) (439)[22]

訳文の siniu は原文の eius にあたる。原文には、訳文の dhes にあたる語が無い。

3.12. $_1$名詞句が名詞 ＋ endi ＋ 名詞、$_2$名詞句が前方照応的な指示代名詞（2例）

$_1$名詞 a ＋ endi ＋ $_1$名詞 b
↑
$_2$前方照応的な指示代名詞

A. $_2$指示代名詞－$_1$名詞 a-endi －$_1$名詞 b（2例）
a) 原文は$_2$関係代名詞－$_1$名詞 a-et －$_1$名詞 b（1例）
Dhes martyrunga endi dodh (Cuius passionem et mortem) (516)

原文と対応する語の配列が同一である。

b) 原文との語順の比較が不可能な例（1例）
dhes ędhili endi odhil (522)[23]

---

[22]本稿では、原文との語順の比較が不可能な場合、原文をあげずにいるが、この例のみは説明のため必要であるのであげておく。
[23]当該名詞句を含む文全体は、次の通りである。
Endi dhes selben christes, dhes uuir iu sinera manniscnissa chiburt after dhera gotnissa guotliihhin chichundidom, chichundemes auh nu dhes ędhili endi odhil. (...et cuius demonstrata est postgloriam deitatis humana natiuitas, demonstretur et genus et patria: ...)
先行する長い属格名詞句を dhes で再提示する形になっている。

3.13. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ 所有代名詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が名詞（1例）

$_1$定冠詞 ＋ $_1$所有代名詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$名詞

A. $_1$定冠詞－$_1$所有代名詞－$_2$名詞－$_1$名詞（1例）
a) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞（1例）
dheru sineru gotnissa guotliihhin (gloriam deitatis) (227-228)

3.14. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ 形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が名詞（4例）

$_1$定冠詞 ＋ $_1$形容詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$名詞

A. $_1$定冠詞－$_1$形容詞－$_2$名詞－$_1$名詞（2例）
a) 原文との語順の比較が不可能な例（2例）
dhemu heilegin daniheles chiscribe (436-437), dhem aldom gotes chibodum (534-535)

B. $_1$定冠詞－$_1$形容詞－$_1$名詞－$_2$名詞（2例）
a) 原文は$_1$形容詞－$_1$名詞－$_2$名詞（1例）
dher erchno sangheri israhelo (egregius psalta israel) (266-267)

訳文では定冠詞が加わるが、対応する語の順序は同一である。

b) 原文との語順の比較が不可能な例（1例）
dher ander heit godes (198)

3.15. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ selb ＋ 名詞、$_2$名詞句が名詞（2例）

$_1$定冠詞 ＋ $_1$selb ＋ $_1$名詞
↑
$_2$名詞

A. $_1$selb－$_1$定冠詞－$_2$名詞－$_1$名詞（1例）
a) 原文との語順の比較が不可能な例（1例）
selbemu dhemu gotes sune (319)

B. $_1$定冠詞－$_1$selb－$_1$名詞－$_2$名詞（1例）
a) 原文は$_1$指示代名詞－$_1$名詞－$_2$名詞（1例）
Dhiu selba maneghiu chinomideo (Ipsa pluralitas personarum) (306-307)

ipse が der selbo で訳されている。対応する部分の順序が、原文と訳文で一致している。

3.16. $_1$名詞句が複数語からなり$_2$名詞句が1語から成る例に見られる語順のヴァリエーションと傾向

$_1$名詞句が複数語からなり$_2$名詞句が1語から成る例は、全部で43例である。

この中に、$_2$名詞句が iro のものが1例（3.9.）、前方照応的な指示代名詞 dhes のものが3例（3.11., 3.12.）含まれている。

$_2$名詞句が iro の例は、al iro meghin (omnis uirtus eorum) (279) であるが、iro の位置は$_1$名詞の前である。原文の eorum は、$_1$名詞の後である。

iro の前に al が置かれているが、形容詞が al でなかったら、iro は形容詞よりも前に置かれたであろう。

$_2$名詞句が前方照応的な指示代名詞 dhes である3例は、3.12.A.a) の Dhes martyrunga endi dodh (Cuius passionem et mortem) (516) と 3.12.A.b) の dhes ędhili endi odhil (522) の2例で、$_1$名詞句が1語から成り$_2$名詞句が dhes の場合と同様、dhes が$_1$名詞句の前に置かれており、3.11. の siniu zeihhan dhes (signa eius) (439) の1例で、$_1$名詞句の後に置かれている。Dhes martyrunga endi dodh (Cuius passionem et mortem) (516) は、原文で dhes に対応しているのが関係代名詞であるということもあり、語順が一致している。siniu zeihhan dhes (signa eius) (439) と dhes ędhili endi odhil (522) は、原文に dhes にあたる語が存在していない。dhes が$_1$名詞句の後に置かれている siniu zeihhan dhes (439) では、$_1$名詞句が所有代名詞を含んでおり、このことが dhes の位置に関係しているのではないかと考えられるが、これについては、最後に述べることにする。

部分属格は、3.2. の dhea sibunzo uuehhono (LXX ebdomadę) (453)、3.3. の zehanzo endi feorzuc uuehhono (CXL ebdomade) (463-464), eines

min dhanne fimfzuc iaaro (annos XL et VIIII) (460-461)、3.4.B.b) の dher rehtuuisigo manno (hominum iustus) (271-272) の４例である。すべての例で、$_2$名詞句は$_1$名詞句の後に置かれている。原文では、形容詞的に用いられた数詞と名詞が組み合わさっている例が４例中３例を占め、部分属格が用いられているのは dher rehtuuisigo manno (hominum iustus) (271-272) のみである。対応する部分の配列を比較してみると、４例の内、dhea sibunzo uuehhono (LXX ebdomadę) (453) と zehanzo endi feorzuc uuehhono (CXL ebdomade) (463-464) の２例は原文と一致しているものの、dher rehtuuisigo manno (hominum iustus) (271-272) と eines min dhanne fimfzuc iaaro (annos XL et VIIII) (460-461) の２例では原文と逆である。この原文との語順の相違からもまた、部分属格を後置する傾向の強さが再確認できると言える。

これらの例を除くと、残るのは35例である。この35例は、３種類の語順に分類できる。１つ目は$_2$名詞句－$_1$名詞句の順のもの (3.1., 3.6.)、２つ目は$_2$名詞句が$_1$名詞の直前に置かれるもの(3.4.A, 3.5.A, 3.7., 3.8., 3.10., 3.13., 3.14.A, 3.15. A)、３つ目は$_1$名詞句－$_2$名詞句の順のもの(3.4.B.a), 3.4.B.c), 3.5.B, 3.14. B, 3.15. B) である。用例数を見てみると、１つ目のタイプが３例、２つ目のタイプが25例、３つ目のタイプが７例で、２つ目のタイプが大多数を占めている。

$_2$名詞句－$_1$名詞句という順の３例は、どれも$_1$名詞句の先頭が$_1$名詞で、その後に分詞句または形容詞＋分詞句を伴う形の特殊なもので、$_1$名詞句も$_2$名詞句も１語から成る場合と同様の扱いがされているものと考えられる。原文では訳文とは逆で、３例とも$_2$名詞が$_1$名詞の後に置かれている[24]。

大多数を占めている$_2$名詞句を$_1$名詞の直前に置くものを原文と比較してみると、ラテン語に冠詞が存在していないことも関係しているが、原文でも$_1$名詞の直前に$_2$名詞句、そしてその前に$_1$名詞以外の$_1$名詞句の語という語順のものは、3.5.A. a) の allem sundono chunnum (omnibus uitiorum gentibus) (538) の１例しか見られない。訳文における定冠詞や所有代名詞の付加を考慮し、原文で$_2$名詞(あるいは訳文の$_2$名詞に対応する語) －$_1$名詞 (句) の順のものという条件で調べてみても、3.4.A.a) の dhemu gotes nemin (dei uocabulo) (292), dher naues sunu (naue filius) (528-529)、と3.10. の sineru selbes stimnu (propria uoce) (335) の３例が加わるだけである。後の21例は、原文で$_1$名詞句－$_2$名詞句 (あるいは訳文の$_1$名詞句に対応する語－訳文の$_2$名詞句に対応する語) の順のものが13例、語順の比較が不可能な例が８例である。原文との比較からも、古高ドイツ語

[24]3.1.A.b)の Truhtines stimna geldenti uuidarloon sinem fiantum (Uox domini reddentis retributionem inimicis suis) (60) と3.6. の gotes stimna hluda in sinaberge quhedhenda (uocem dei intonantis) (255-256) では、既に述べたように、原文と訳文で、分詞 (句) が修飾している名詞が異なっている。

Isidor では、$_1$名詞句が複数語から成り$_2$名詞句が１語から成る場合、$_2$名詞句を$_1$名詞句の$_1$名詞の直前に置く傾向が強いということが更に確認できる。

$_1$名詞句－$_2$名詞句という順の７例では、原文でも$_1$名詞句－$_2$名詞句の順のものが５例と、多数を占めている。残りの２例は、原文との語順の比較が不可能なものである[25]。

4. $_1$名詞句も$_2$名詞句も複数語から成る場合（20例）

4.1. $_1$名詞句が名詞 ＋ zi Gerundium、$_2$名詞句が定冠詞 ＋ 名詞（１例）

$_1$名詞 ＋$_1$zi Gerundium
↑
$_2$定冠詞 ＋$_2$名詞

A. $_2$定冠詞－$_2$名詞－$_1$名詞－$_1$zi Gerundium（１例）

a) ラテン語は$_1$名詞－$_3$名詞－$_2$Gerundium（１例）

dera magadi ziit…za gaberanne (tempus uirginis parturiendi)（66）

4.2. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が定冠詞 ＋ 名詞（２例）

$_1$定冠詞 ＋$_1$名詞
↑
$_2$定冠詞 ＋$_2$名詞

A. $_1$定冠詞－$_1$名詞－$_2$定冠詞－$_2$名詞（２例）

a) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞（２例）

Dhiu uurza dhera spaida (Radix sapientię)（115），dhazs chiscrip dhero folcho (scripturis populorum)（420–421）

---

[25]この２例は、3.4.B.c)の dher angil gotes (444) と3.14.B.b)の dher ander heit godes (198)である。どちらも$_2$名詞句は gotes である。これについては註14を参照のこと。

4.3. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ 形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が定冠詞 ＋ 名詞（２例）

$_1$定冠詞 ＋$_1$形容詞 ＋$_1$名詞
↑
$_2$定冠詞 ＋$_2$名詞

A. $_1$定冠詞－$_1$形容詞－$_1$名詞－$_2$定冠詞－$_2$名詞（２例）
a) 原文は$_1$名詞－$_1$形容詞－$_2$名詞（１例）
dhiu zifarande chiscaft dhero dodhliihhono (condicio caduca mortalium) (125-126)

$_1$名詞句と$_2$名詞句の位置関係は、原文と訳文で同じである。

b) 原文は$_2$名詞－$_1$名詞（１例）
dhazs meghiniga chiruni dhera dhrinissa (trinitatis…mysterium) (307-308)

4.4. $_1$名詞が定冠詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が定冠詞 ＋ 形容詞 ＋ 名詞（２例）

$_1$定冠詞 ＋$_1$名詞
↑
$_2$定冠詞 ＋$_2$形容詞 ＋$_2$名詞

A. $_1$定冠詞－$_1$名詞－$_2$定冠詞－$_2$形容詞－$_2$名詞（２例）
a) 原文は$_2$名詞－$_1$名詞（１例）
dhea gheba dhera heilegun daufin (baptismi gratiam) (537-538)

b) 原文は$_2$名詞－$_2$形容詞－$_1$名詞（１例）
dheo uualaæhti dhes euuighin libes (uitę aeternae possessionem) (541-542)

4.5. $_1$名詞が定冠詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が定冠詞 ＋ 分詞句 ＋ 名詞（１例）

$_1$定冠詞 ＋$_1$名詞
↑
$_2$定冠詞 ＋$_2$分詞句 ＋$_2$名詞

A. $_1$定冠詞－$_1$名詞－$_2$定冠詞－$_2$分詞句－$_2$名詞（1例）

a) 原文は$_1$名詞－$_2$形容詞（完了分詞）－$_2$名詞（1例）

dhea lantscaffi dhes im chiheizssenin arbes (terram promissę hereditatis) (531-532)

$_1$名詞句と$_2$名詞句の位置関係は、原文と訳文で同じである。

4.6. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ 形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句も定冠詞 ＋ 形容詞 ＋ 名詞（1例）

$_1$定冠詞 ＋ $_1$形容詞 ＋ $_1$名詞

↑

$_2$定冠詞 ＋ $_2$形容詞 ＋ $_2$名詞

A. $_1$定冠詞－$_1$形容詞－$_1$名詞－$_2$定冠詞－$_2$形容詞－$_2$名詞（1例）

a) 原文は$_1$形容詞－$_2$形容詞－$_2$名詞－$_1$名詞（1例）

dhea dhrifaldun ebanchiliihnissa dhera almahtigun gotliihhin (trinam diuinę omnipotentię equalitatem) (342-343)

omnimotentia が almahtig で、diuinus が gotliihhin で訳されており、$_2$名詞句中で 形容詞と名詞が入れ替わっている。

4.7. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ 形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が定冠詞 ＋ 形容詞 ＋ 名詞 ＋ 前置詞句（1例）

$_1$定冠詞 ＋ $_1$形容詞 ＋ $_1$名詞

↑

$_2$定冠詞 ＋ $_2$形容詞 ＋ $_2$名詞 ＋ $_2$前置詞句

A. $_1$定冠詞－$_1$形容詞－$_1$名詞－$_2$定冠詞－$_2$形容詞－$_2$名詞－$_2$前置詞句（1例）

a) 原文は$_1$名詞－$_2$形容詞－$_2$名詞（1例）

dhazs gheistliihhe chiruni dhera himiliscun chiburdi in christe (misterium celestis natiuitatis in christo) (377-378)

$_1$名詞句と$_2$名詞句の位置関係は、原文と訳文で同じである。

4.8. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が所有代名詞 ＋ 名詞（２例）

$_1$定冠詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$所有代名詞 ＋ $_2$名詞

A. $_1$定冠詞－$_1$名詞－$_2$所有代名詞－$_2$名詞（２例）
a) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞－$_2$所有代名詞（１例）
dher dau dhinera iugundhi (ros aduliscentię tuę) (412)

$_2$名詞句の中で、名詞と所有代名詞の位置が入れ替わっているが、$_1$名詞句と$_2$名詞句の位置関係は同じである。

b) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞（１例）
dhen titulo sines riihhes (titulum regni) (398)

これも、$_1$名詞句と$_2$名詞句の位置関係は同じである。

4.9. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が形容詞 ＋ 名詞（１例）

$_1$定冠詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$形容詞 ＋ $_2$名詞

A. $_1$定冠詞－$_2$形容詞－$_2$名詞－$_1$名詞（１例）
a) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞（１例）
dher allero heilegono heilego (sanctus sanctorum) (455)

4.10. $_1$名詞句が形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句も形容詞 ＋ 名詞（１例）

$_1$形容詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$形容詞 ＋ $_2$名詞

A. $_1$形容詞－$_1$名詞－$_2$形容詞－$_2$名詞（1例）
a) 原文は$_2$名詞－$_2$形容詞－$_1$名詞（1例）
allem herrum ubilero angilo (angelorum malorum hostibus) (539)

4.11. $_1$名詞句が形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が名詞 ＋ endi ＋ 名詞（1例）

$_1$形容詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$名詞 a ＋ endi ＋ $_2$名詞 b

A. $_1$形容詞－$_2$名詞 a-endi －$_2$名詞 b －$_1$名詞（1例）
a) 原文も$_1$形容詞－$_2$名詞 a －$_2$名詞 b-que －$_1$名詞（1例）
elliu himilo endi aerdha chiscafti (cuncte celi terręque creature) (426-427)

4.12. $_1$名詞句は副詞 ＋ 形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句は定冠詞 ＋ 名詞（1例）

$_1$副詞 ＋ $_1$形容詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$定冠詞 ＋ $_2$名詞

A. $_1$副詞－$_1$形容詞－$_1$名詞－$_2$定冠詞－$_2$名詞（1例）
a) 原文は$_1$形容詞－$_1$名詞－$_2$名詞（1例）
so manacsamo gheba dhes gheistes (tanta dona spiritus) (669-670)

$_1$名詞句と$_2$名詞句の位置関係は、原文と訳文で同じである。

4.13. $_1$名詞句が形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が定冠詞 ＋ 形容詞 ＋ 名詞（1例）

$_1$形容詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$定冠詞 ＋ $_2$形容詞 ＋ $_2$名詞

A. $_1$形容詞－$_1$名詞－$_2$定冠詞－$_2$形容詞－$_2$名詞（1例）
a) 原文は$_1$名詞－$_2$形容詞－$_2$名詞－$_1$形容詞（完了分詞）（1例）
gareuuem bilidum dhes heilegin chiscribes (exemplis sanctarum scribturarum adhibitis) (134)

4.14. $_1$名詞句が形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が定冠詞 ＋ selb ＋ 名詞（1例）

$_1$形容詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$定冠詞 ＋ $_2$selb ＋ $_2$名詞

A. $_2$定冠詞－$_2$形容詞－$_2$名詞－$_1$形容詞－$_1$名詞（1例）
a) 原文は$_2$関係形容詞－$_2$名詞－$_1$名詞（1例）
Dhera selbun dhrinissa heilac chiruni (Cuius trinitatis sacramentum) (309)

原文の関係形容詞 cuius を dhera selbun で訳している。原文、訳文共に$_2$名詞句－$_1$名詞句の順である。

4.15. $_1$名詞句が数詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が定冠詞 ＋ 名詞（1例）

$_1$数詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$定冠詞 ＋ $_2$名詞

A. $_1$数詞－$_1$名詞－$_2$定冠詞－$_2$名詞（1例）
a) 原文は$_1$数詞－$_1$名詞－$_2$名詞（1例）
eina guotliihhin dhera dhrinissa (unam gloriam trinitatis) (363)

$_2$名詞句に定冠詞が加わっているだけで、原文と訳文の語順は同じである。

4.16. $_1$名詞句が数詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が定冠詞 ＋ 形容詞 ＋ 名詞（1例）

$_1$数詞 ＋$_1$名詞
↑
$_2$定冠詞 ＋$_2$形容詞 ＋$_2$名詞

A. $_1$数詞－$_1$名詞－$_2$定冠詞－$_2$形容詞－$_2$名詞（１例）
a) 原文は$_1$数詞－$_1$名詞－$_2$形容詞－$_2$名詞（１例）
ein namo dhes unchideiliden meghines (unum nomen indiuiduę maiestatis) (260-261)

これも、$_2$名詞句に定冠詞が加わっているだけで、原文と訳文の語順は同じである。

4.17. $_1$名詞句も$_2$名詞句も複数語から成る例に見られる語順のヴァリエーションと傾向

$_1$名詞句も$_2$名詞句も複数語から成る例は、20例見られる。部分属格の例は見られない。20例の内、$_1$名詞句－$_2$名詞句の順のものが16例と、大半を占めており、残りは$_2$名詞句－$_1$名詞句の順のものと$_1$名詞の直前に$_2$名詞句を置いているものがそれぞれ２例ずつである。

$_1$名詞句を構成している語数は２～３語、$_2$名詞句は２～５語であるが、構成語

表１

$_1$名詞句と$_2$名詞句の語数詞	語順	用例数
$_1$名詞句が２語、$_2$名詞句が２語	$_2$名詞句－$_1$名詞句の順	0
	$_1$名詞句－$_2$名詞句の順 (4.2., 4.8., 4.10., 4.15.)	6
	$_1$名詞の直前に$_2$名詞句 (4.9.)	1
$_1$名詞句が２語、$_2$名詞句が３語	$_2$名詞句－$_1$名詞句の順 (4.14.)	1
	$_1$名詞句－$_2$名詞句の順 (4.4., 4.13., 4.16)	4
	$_1$名詞の直前に$_2$名詞句 (4.11.)	1
$_1$名詞句が２語、$_2$名詞句が４語	$_2$名詞句－$_1$名詞句の順	0
	$_1$名詞句－$_2$名詞句の順 (4.5)	1
	$_1$名詞の直前に$_2$名詞句	0

$_1$名詞句が３語、$_2$名詞句が２語	$_2$名詞句－$_1$名詞句の順（4.1.）	1
	$_1$名詞句－$_2$名詞句の順（4.3., 4.12.）	3
	$_1$名詞の直前に$_2$名詞句	0
$_1$名詞句が３語、$_2$名詞句が３語	$_2$名詞句－$_1$名詞句の順	0
	$_1$名詞句－$_2$名詞句の順（4.6.）	1
	$_1$名詞の直前に$_2$名詞句	0
$_1$名詞句が３語、$_2$名詞句が５語	$_2$名詞句－$_1$名詞句の順	0
	$_1$名詞句－$_2$名詞句の順（4.7.）	1
	$_1$名詞の直前に$_2$名詞句	0

数による語順の偏りは見られない（表１）。

$_1$名詞句－$_2$名詞句の順のものを原文と比較してみると、10例は原文でも$_1$名詞句－$_2$名詞句の順であるものの、６例は異なる語順を示しており、訳文で語順が改められている。このことからも、$_1$名詞句も$_2$名詞句も複数語から成っている場合には、$_1$名詞句－$_2$名詞句という順になる傾向が非常に強いことが伺える。

$_2$名詞句－$_1$名詞句の順の２例は、4.1. の dera magadi ziit (biquami) za gaberanne (tempus uirginis parturiendi)（66）と4.14.のDhera selbun dhrinissa heilac chiruni (Cuius trinitatis sacramentum)（309）である。dera magadi ziit (biquami) za gaberanne (66)では、zi Gerundium が定動詞 biquami を挟んで後置されており、全体が２つの部分に分断されている。前半部の dera magadi ziit のみを見るならば、$_2$名詞句－$_1$名詞句という語順は、特異な語順ではなく、逆にはるかにより多く見られる語順である[26]。もう一つの Dhera selbun dhrinissa heilac chiruni (Cuius trinitatis sacramentum)（309）は、原文と同じ語順を示しているが、原文では$_2$名詞句が関係形容詞を含んでおり、これが der selbo で訳され、文頭に置かれている。$_2$名詞句が前に置かれているのは、前文とのつながりによるものと考えられる。

$_1$名詞の直前に$_2$名詞句を置いている２例は、4.9. の dher allero heilegono heilego (sanctus sanctorum)（455）と4.11.の elliu himilo endi aerdha chiscafti (cuncte celi terręque creature)（426-427）である。前者は、原文では$_1$名詞－$_2$名詞の順であるのが、$_1$名詞の直前に$_2$名詞句を置く語順に改められている。これは、数行前に出てくる dhero heilegono heilego (sanctus sanctorum)（451-452）に合わせたためと考えられる。後者は、原文と同じ語順を示している。この例では、$_2$名詞句において２つの名詞が endi で結ばれているが、これは$_2$名

[26]「古高ドイツ語 Isidor における属格付加語の位置(1)」の52ページを参照のこと。

詞が他の語により修飾されている他の例とは構造が異なっている。この例は、elliu himilo chiscafti endi elliu aerdha chiscafti が圧縮されたものであり、そこから$_2$名詞句が$_1$名詞の直前に置かれていることは説明できよう。

このように、$_1$名詞句－$_2$名詞句以外の語順の例はすべて特別な理由があってそのような語順になっているのであり、このことは$_1$名詞句も$_2$名詞句も複数語から成る場合には$_1$名詞句－$_2$名詞句の順が基本であることを更に裏付けていると言える。

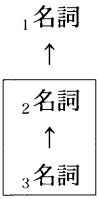
規定詞の存在と語順の関係を見てみると、まず、$_1$名詞句が定冠詞もしくは数詞の ein を含む場合、$_2$名詞句がその前に置かれている例は存在していない。$_2$名詞句－$_1$名詞句の順の２例は、どちらも$_1$名詞句が規定詞を持っていない。

$_2$名詞句が定冠詞か所有代名詞を含んでいると、$_1$名詞句は$_2$名詞句の前後どちらかに置かれ、$_1$名詞句の$_1$名詞以外の要素と$_1$名詞の間に挿入されている例は無い。ただし、$_2$名詞句の規定詞が al の時は、そうした例が見られる（dher allero heilegono heilego (455)）。

$_1$名詞句、$_2$名詞句共に定冠詞、所有代名詞、数詞の ein のいずれかを持つ場合には、語順は必ず$_1$名詞句－$_2$名詞句である。

5. $_3$名詞句が$_2$名詞句を、そして$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句が$_1$名詞句を修飾している場合(18例)

5.1. $_1$名詞句が名詞、$_2$名詞句が名詞、$_3$名詞句が名詞（６例）



A. $_3$名詞－$_2$名詞－$_1$名詞（１例）

a) 原文は２分成分（１例）

IUDASES CHUNNES FLEISCHE (TRIBU IUDA SECUNDUM CARNEM) (575-576)

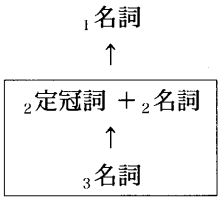
原文で２分成分のものが１文成分にまとめられているが、対応する語の配列は同一である[27]。

B. $_1$名詞－$_3$名詞－$_2$名詞（５例）

a) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞－$_3$名詞（５例）

umbihringa mittingardes ęrdha (cardines orbis terre) (91)[28], bighin gotes sunes (origo…filii dei) (116), christan iacobes gotes (christo dei iacob) (266), christ iacobes gotes (christum dei iacob) (273), gheist gotes forahtun (spiritus timoris domini) (668)

5.2. $_1$名詞句が名詞、$_2$名詞句が定冠詞 ＋ 名詞、$_3$名詞句が名詞（１例）



A. $_1$名詞－$_2$定冠詞－$_3$名詞－$_2$名詞（１例）

a) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞－$_3$名詞（１例）

ziidh dhera christes chiburdi (tempus natiuitatis christi) (434–435)

5.3. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が名詞、$_3$名詞句が名詞（２例）

---

[27]当該名詞句を含む文全体をあげると、次の通りである。

ENDI BIHUUIU MAN IN IUDASES CHUNNES FLEISCHE CHRISTES BIDENDI UUAS, Iacob dher hoho fater bauhnendo quhad：… (ET QUIA DE TRIBU IUDA SECUNDUM CARNEM CHRISTUS EXPECTANDUS ESSET, Iacob patriarcha significat dicens：…)

原文の DE TRIBU IUDA SECUNDUM CARNEM の部分が IN IUDASES CHUNNES FLEISCHE と訳されている。原文の DE TRIBU IUDA と SECUNDUM CARNEM とは、別文成分である。

[28] umbihringa は cardines の、mittingardes は orbis の、ęrdha は terre の訳語であるが、原文では terre が orbis を修飾しているのに対し、訳文では mittingardes が ęrdha を修飾していると解すべきであろう。

$_1$定冠詞 ＋ $_1$名詞

↑

$_2$名詞

↑

$_3$名詞

A. $_1$定冠詞－$_1$名詞－$_3$名詞－$_2$名詞（２例）

a) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞（１例）

dhea chumft christes chiburdi (ortum christi) (581)

原文の ortum（$_1$名詞）は訳文の chiburdi（$_2$名詞）に、原文の christi（$_2$名詞）は訳文の christes（$_3$名詞）にあたり、原文には dhea chumft（$_1$名詞句）にあたる名詞句が無い。

b) 原文は$_1$名詞－$_2$名詞－$_3$名詞（１例）

dhiu sahha christes chiburdi (causa natiuitatis christi) (510)

5.4. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ 形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が名詞、$_3$名詞句が名詞（１例）

$_1$定冠詞 ＋ $_1$形容詞 ＋ $_1$名詞

↑

$_2$名詞

↑

$_3$名詞

A. $_1$定冠詞－$_1$形容詞－$_1$名詞－$_3$名詞－$_2$名詞（１例）

a) 原文は$_1$名詞－$_1$形容詞－$_2$名詞（１例）

dhemu eristin deile chuningo boohho (libro…primo regum) (263–264)

原文の libro（$_1$名詞）は訳文の boohho（$_2$名詞）に、原文の primo（$_1$形容詞）は訳文の eristin（$_1$形容詞）に、原文の regum（$_2$名詞）は訳文の chuningo（$_3$名詞）にあたる。構造も語順も原文とは大きく異なっている。

5.5. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ selb ＋ 名詞、$_2$名詞句が名詞、$_3$名詞句が名詞（１例）

$_1$定冠詞 ＋$_1$selb ＋$_1$名詞
↑
$_2$名詞
↑
$_3$名詞

A. $_1$定冠詞－$_1$selb －$_3$名詞－$_2$名詞－$_1$名詞（１例）
a) 原文との語順の比較が不可能な例（１例）
dhiu selbun christes chumfti ziidh (462)

5.6. $_1$名詞句が形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が不定代名詞、$_3$名詞句が定冠詞 ＋ 名詞（１例）

$_1$形容詞 ＋$_1$名詞
↑
$_2$不定代名詞
↑
$_3$定冠詞 ＋$_3$名詞

A. $_2$不定代名詞－$_3$定冠詞－$_3$名詞－$_1$形容詞－$_1$名詞（１例）
a) 原文は２分成分（１例）
eochihuuiliihhes dhero heideo sundric undarscheit (sub propria cuiusque persona distinctio trinitatis) (317-318)[29]

原文の distinctio が訳文の undarscheit に、cuiusque が eochihuuiliihhes に、propria が sundric に、persona が dhero heideo にあたる。trinitas にあたる語は、訳文に存在していない。原文では sub propria cuiusque persona と distinctio trinitatis は別文成分である。原文では cuiusque が propria persona を修飾しているが、訳文では逆に、dhero heideo が eochihuuliliihhes を修飾している。

[29]文全体は、次の通りである。
So sama so auh araughit ist in isaies buohhum eochihuueliihhes dhero heideo sundric undarscheit, selbemu dhemu gotes sune quhedhendemu : … (In esaia quoque sub propria cuiusque persona distinctio trinitatis dicente eodem filio ita ostenditur: …)

また、原文の propria が persona を修飾しているのに対し、訳文の sundric は undarscheit を修飾している。

$_3$名詞句は部分属格である。

5.7. $_1$名詞句が指示代名詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が定冠詞 ＋ 名詞、$_3$名詞句が名詞（１例）

$_1$指示代名詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$定冠詞 ＋ $_2$名詞
↑
$_3$名詞

A. $_1$指示代名詞－$_1$名詞－$_2$定冠詞－$_3$名詞－$_2$名詞（１例）

a) 原文は $_1$指示代名詞－$_1$名詞－$_2$名詞－$_3$名詞（１例）

Dhesa infleiscnissa…dhes gotes sunes (Hanc incorporationem filii dei) (413)

5.8. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が定冠詞 ＋ 数詞 ＋ 名詞、$_3$名詞句が名詞（２例）

$_1$定冠詞 ＋ $_1$名詞
↑
$_2$定冠詞 ＋ $_2$数詞 ＋ $_2$名詞
↑
$_3$名詞

A. $_1$定冠詞－$_1$名詞－$_2$定冠詞－$_2$数詞－$_2$名詞－$_3$名詞（２例）[30]

a) 原文は $_3$名詞－$_2$数詞－$_2$名詞－$_1$名詞（１例）

dhemu bauhnunge dhero dhrio heido gotes (deitate trium personarum significatio[31]) (367-368)

---

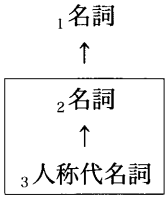
[30] 2例とも $_3$名詞は gotes である。

[31] deitate, significatio は、正しくはそれぞれ deitatis, significatione。

b) 原文は$_2$名詞−$_1$名詞（1例）
DHEA BAUHNUNGA DHERO DHRIO HEIDEO GOTES (TRINITATIS SIGNIFICANTIA) (250-251)

原文では、GOTES（$_3$名詞）にあたる語が無い。

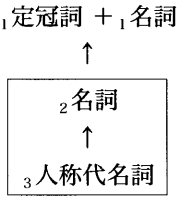
5.9. $_1$名詞句が名詞、$_2$名詞句が名詞、$_3$名詞句が人称代名詞（1例）



A. $_1$名詞−$_3$人称代名詞−$_2$名詞（1例）
a) 原文は$_1$名詞−$_2$名詞（1例）
chimeinidh iro einuuerches (communio cooperationis) (283-284)

原文では、iro（$_3$人称代名詞）にあたる語が無い。

5.10. $_1$名詞句が定冠詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が名詞、$_3$名詞句が人称代名詞（1例）



A. $_1$定冠詞−$_1$名詞−$_3$人称代名詞−$_2$名詞（1例）
a) 原文は$_1$名詞 a-et −$_1$名詞 b（1例）
dhiu blostar iro ghelstro (libamina et sacrificia) (478)

blostar（$_1$名詞）は原文の libamina（$_1$名詞 a）に、ghelstro（$_2$名詞）は原文の sacrificia（$_1$名詞 b）にあたる。原文と訳文で構造が異なるものの、対応する

名詞の順序は同一である。

なお、原文には iro（$_3$名詞句）にあたる語は存在していない。

5.11. $_1$名詞句が形容詞 ＋ 名詞、$_2$名詞句が名詞 ＋ ioh ＋ 名詞、$_3$名詞句が名詞（1例）

$_1$形容詞 ＋ $_1$名詞

↑

$_2$名詞 a ＋ ioh ＋ $_2$名詞 b

↑

$_3$名詞

A. $_1$形容詞－$_1$名詞－$_3$名詞－$_2$名詞 a-ioh －$_2$名詞 b（1例）

a) 原文は$_1$形容詞－$_1$名詞－$_2$名詞 a-et －$_2$名詞 b（1例）

elliu folnissa gotes ghebono ioh gheistes (tota…plenitudo diuinitatis et gratiarum) (672)

原文の tota（$_1$形容詞）が訳文の elliu（$_1$形容詞）に、原文の plenitudo（$_1$名詞）が訳文の folnissa（$_1$名詞）に、原文の diuinitatis（$_2$名詞 a）が訳文の$_3$名詞に、原文の gratiarum（$_2$名詞 b）が訳文の ghebono（$_2$名詞 a）に対応している。だいぶ異なった形に訳されているものの、語順には共通性が見られる。

5.12. $_3$名詞句が$_2$名詞句を、そして$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句が$_1$名詞句を修飾している例の語順のヴァリエーションと傾向

$_3$名詞句が$_2$名詞句を、そして$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句が$_1$名詞句を修飾している例は全部で18例である。

まず、$_2$名詞句と$_3$名詞句の順序を見ていく。18例の内、部分属格は5.6. の eochihuuiliihhes dher heideo (317-318) の1例のみである。$_2$名詞句－$_3$名詞句の順を示している。

iro が$_3$名詞句のものは2例存在している（5.9., 5.10.）。どちらも iro は$_2$名詞句の前に置かれており、また原文に iro にあたる語が無い。

これらの3例を除くと、残るのは15例である。この15例につき、$_2$名詞句と$_3$名詞句がそれぞれ何語から成り立っているか、及び$_2$名詞句と$_3$名詞句の順序がどのようになっているかをまとめたのが表2である。

表2

$_2$名詞句と$_3$名詞句の語数	語順	用例数
$_2$名詞句も$_3$名詞句も1語	$_3$名詞句－$_2$名詞句の順 (5.1., 5.3., 5.4., 5.5.)	10
	$_2$名詞句－$_3$名詞句の順	0
$_2$名詞句が2語、$_3$名詞句が1語	$_3$名詞句－$_2$名詞句の順	0
	$_2$名詞句－$_3$名詞句の順	0
	$_2$名詞の直前に$_3$名詞句 (5.2., 5.7.)	2
$_2$名詞句が3語、$_3$名詞句が1語	$_3$名詞句－$_2$名詞句の順 (5.11.)	1
	$_2$名詞句－$_3$名詞句の順 (5.8.)	2
	$_2$名詞の直前に$_3$名詞句	0

$_2$名詞句も$_3$名詞句も共に1語から成る10例は、すべて$_3$名詞句－$_2$名詞句の順である。$_2$名詞句が2語で$_3$名詞句が1語の2例（5.2., 5.7.）は、どちらも$_3$名詞句を$_2$名詞の直前に置く語順である。$_2$名詞句も$_3$名詞句も共に1語から成る例も、$_2$名詞句が2語で$_3$名詞句が1語の例も、$_1$名詞句と$_2$名詞句のみから成る2層構造において両名詞句間に見られるのと同様の語順傾向を示している。

これに対し、$_2$名詞句が3語で$_3$名詞句が1語の3例（5.8., 5.11.）は、$_3$名詞句－$_2$名詞句の順のものが1例、$_2$名詞句－$_3$名詞句の順のものが2例となっている。この3例を子細に見てみると、まず5.11. gotes ghebono ioh gheistes (672) は、$_2$名詞句が2つの名詞が ioh で結ばれた構造をしている。この構造では、$_3$名詞句を$_2$名詞句中に挿入するのは困難であろう。また、gotes ghebono ioh gheistes というのは、gotes ghebono ioh gotes gheistes を圧縮したものであり、それからすると$_3$名詞句－$_2$名詞句という順は、むしろ2層構造の場合に見られた語順傾向と一致していると見ることができる。

あとの2例は$_2$名詞句－$_3$名詞句の順であるが、この2例を、$_1$名詞句も含めて比較してみると、5.8.A.a) dhemu bauhnunge dhero dhrio heido gotes (deitate trium personarum significatio) (367-368) と 5.8.A.b) DHEA BAUHNUNGA DHERO DHRIO HEIDEO GOTES (TRINITATIS SIGNIFICANTIA) (250-251) で、$_1$名詞句の数と格が違っているだけで、あとは同一である。5.8.A.b) DHEA BAUHNUNGA DHERO DHRIO HEIDEO GOTES (250-251) は、第4章のタイトル文の中に出てきているのだが、5.8.A.a) dhemu bauhnunge dhero dhrio heido gotes (367-368) は、同章の終わり近くでこの表現を、形は大きく異なっているもののほぼ同じ意味を表している原文を訳すのに、ほとんどそのままの形で再び用いたものである。$_2$名詞句－$_3$名詞句という順の2例という用例数は、この点を考慮して見る必要があろう。

こうしてみて見ると、$_2$名詞句が３語、$_3$名詞句が１語から成る用例の数の分布をもって、$_1$名詞句と$_2$名詞句のみから成る２層構造における両名詞句の配列の傾向と、$_1$名詞句と$_2$名詞句と$_3$名詞句から成る３層構造における$_2$名詞句と$_3$名詞句の配列の傾向との間に違いがあると考える必要はなさそうである。

次に、$_1$名詞句と$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句の位置関係を見てみる。$_1$名詞句及び$_2$名詞句＋$_3$名詞句それぞれの構成語数と相互の位置関係をまとめたのが表３である。

表３

$_1$名詞句と$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句の語数	語順	用例数
$_1$名詞句が１語、$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句が２語	$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句－$_1$名詞句の順 (5.1.A.)	1
	$_1$名詞句－$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句の順 (5.1.B., 5.9.)	6
$_1$名詞句が１語、$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句が３語	$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句－$_1$名詞句の順	0
	$_1$名詞句－$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句の順 (5.2.)	1
$_1$名詞句が２語、$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句が２語	$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句－$_1$名詞句の順	0
	$_1$名詞句－$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句の順 (5.3., 5.10.)	3
	$_1$名詞の直前に$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句	0
$_1$名詞句が２語、$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句が３語	$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句－$_1$名詞句の順 (5.6.)	1
	$_1$名詞句－$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句の順 (5.7.)	1
	$_1$名詞の直前に$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句	0
$_1$名詞句が２語、$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句が４語	$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句－$_1$名詞句の順	0
	$_1$名詞句－$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句の順 (5.8., 5.11.)	3
	$_1$名詞の直前に$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句	0
$_1$名詞句が３語、$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句が２語	$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句－$_1$名詞句の順	1
	$_1$名詞句－$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句の順 (5.4.)	1
	$_1$名詞の直前に$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句 (5.5.)	1

$_1$名詞句及び$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句がそれぞれ何語から成っていようと、ほとんどの例が$_1$名詞句－$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句の順で、18例中15例を占めている。残りの３例は、２例が$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句－$_1$名詞句の順、１例が$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句を複

数語から成る$_1$名詞句の$_1$名詞の直前に配置する語順を示している。$_1$名詞句が$_2$名詞句と$_3$名詞句の間に入り込んだ$_2$名詞句－$_1$名詞句－$_3$名詞句あるいは$_3$名詞句－$_1$名詞句－$_2$名詞句という語順の例は存在していない。

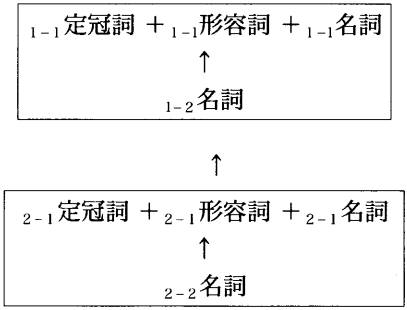
原文と比較してみると、構造も語順も完全に一致している例は、1例も無い。かろうじて、5.1.A. IUDASES CHUNNES FLEISCHE (TRIBU IUDA SECUNDUM CARNEM) (575–576) と5.11. elliu folnissa gotes ghebono ioh gheistes (tota…plenitudo diuinitatis et gratiarum) (672)の2例で、構造が変わっていたり、語が加わっていたりしているが、訳文の$_1$名詞句、$_2$名詞句、$_3$名詞句に対応する語句の配列に共通性が見られる程度である。とりわけ原文との差異が大きいのが、$_2$名詞句と$_3$名詞句の配列である。$_2$名詞句も$_3$名詞句も1語から成る10例では、原文と同一構造・同一語順のものは1例も無い。$_2$名詞句が複数語、$_3$名詞句が1語から成る例でも、上述の gotes ghebono ioh gheistes (672)以外は、原文と語順が逆であったり、原文に$_3$名詞句に対応するものが無かったりである。

規定詞の存在と語順の関係について見てみると、$_1$名詞句が定冠詞あるいは指示代名詞を伴っている場合、$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句は$_1$名詞句の後か$_1$名詞の直前に置かれており、$_1$名詞句の前に置かれている例は無い[32]。$_1$名詞句の前に$_2$名詞句＋$_3$名詞句が置かれている2例の内、1例は$_1$名詞句が名詞1語であるし(5.1.A.)、もう1例も$_1$名詞句が規定詞を伴っていない (5.6.)。また、この後者の例は、$_2$名詞句が規定詞を伴っていない。

$_2$名詞句が定冠詞を含むか、あるいは$_3$名詞句が所有代名詞と同機能の iro の例は全部で6例あるが (5.2., 5.7., 5.8., 5.9., 5.10.)、この6例すべてで$_1$名詞句の後に$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句が来ている。この6例の内、2例が$_1$名詞句が名詞1語から成るもので (5.2., 5.9.)、あとの4例は$_1$名詞句が複数語から成るものである (5.7., 5.8., 5.10)。この4例すべてにおいて、$_1$名詞句は規定詞を伴っている。

[32] $_1$名詞句が al を伴っている elliu folnissa gotes ghebono ioh gheistes (672) でも、$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句は$_1$名詞句の後である。

6. $_{1-1}$名詞句と$_{1-2}$名詞句により形成される名詞句全体が、$_{2-1}$名詞句と$_{2-2}$名詞句により形成される属格名詞句により修飾されている場合（1例）



A. $_{1-1}$定冠詞－$_{1-1}$形容詞－$_{1-2}$名詞－$_{1-1}$名詞－$_{2-1}$定冠詞－$_{2-1}$形容詞－$_{2-2}$名詞－$_{2-1}$名詞（1例）

a) 原文は$_{3}$名詞－$_{2}$形容詞－$_{2}$名詞－$_{1}$名詞（1例）

dhazs almahtiga gotes chiruni dhera gotliihun christes chiburdi (christi diuinę natiuitatis mysterium) (132–133)

$_{1-1}$名詞句と$_{1-2}$名詞句により形成されている名詞句も、$_{2-1}$名詞句と$_{2-2}$名詞句により形成されている名詞句も、同一構造・同一語順であり、$_{1-1}$名詞句及び$_{2-1}$名詞句が定冠詞と形容詞と名詞から成り、名詞1語から成る$_{1-2}$名詞句及び$_{2-2}$名詞句がそれぞれ$_{1-1}$名詞と$_{2-1}$名詞の直前に挿入されている。これは、$_{1}$名詞句が複数語で$_{2}$名詞句が1語の2層構造において大半を占めていた語順である。

$_{1-1}$名詞句 ＋$_{1-2}$名詞句の後に$_{2-1}$名詞句 ＋$_{2-2}$名詞句が置かれているが、$_{1-1}$名詞句も$_{2-1}$名詞句も定冠詞を伴っている。

原文と比較してみると、原文の christi（$_{3}$名詞）が訳文の christes（$_{2-2}$名詞）に、原文の diuinę（$_{2}$形容詞）が訳文の gotliihun（$_{2-1}$形容詞）に、原文の natiuitatis（$_{2}$名詞）が訳文の chiburdi（$_{2-1}$名詞）に、原文の mysterium（$_{1}$名詞）が訳文の dhazs almahtiga gotes chiruni（$_{1-1}$定冠詞－$_{1-1}$形容詞－$_{1-2}$名詞－$_{1-1}$名詞）に対応している。原文で最後に置かれている mysterium の1語が4語で表され、位置も$_{2-1}$名詞句 ＋$_{2-2}$名詞句の前へ移されている。christi diuinę natiuitatis も、定冠詞が加えられるとともに、christi にあたる christes が natiuitatis にあたる chiburdi の直前に移されている。

7. 全体を俯瞰して

全体を俯瞰してみると、まず、部分属格は、従来言われているように、被修飾名詞句の後に置かれるのが大半となっている[33]。

部分属格以外では、関係代名詞や疑問詞の属格は、被修飾名詞句の前に置かれている。ただし、古高ドイツ語 Isidor では、被修飾名詞句が 1 語から成る例しか存在していない。

前方照応的な指示代名詞の属格も、3.11. siniu zeihhan dhes (signa eius) (439) 以外、すべて被修飾名詞句の前に置かれている。ただし、古高ドイツ語 Isidor には、被修飾名詞句が複数語から成る例は、2 つの名詞が ioh で結ばれたものしか無く、名詞とそれを修飾する語から成っているものは無い。

所有代名詞と同機能の人称代名詞複数属格 iro も、3.9. al iro meghin (omnis uirtus eorum) (279) 以外、すべて被修飾名詞句の前に置かれている。ただし、iro が前置されている例の被修飾名詞句はすべて名詞 1 語である。al iro meghin (279) は、唯一、被修飾名詞句が複数語から成っている例でもあるが、既に述べたように、iro が所有代名詞と同じ振舞いをすることからすると、iro がこの位置にあるのは、被修飾名詞句の形容詞が al であるためであろう。

これらの例を除くと、属格名詞句の位置は、被修飾名詞句と属格名詞句がそれぞれ何語から成っているか、及び $_1$名詞句と $_2$名詞句のみから成る 2 層構造かそれとも $_1$名詞句と $_2$名詞句と $_3$名詞句から成る 3 層構造かにより、異なった傾向を示している。

$_1$名詞句と $_2$名詞句のみから成る 2 層構造から見ていくと、$_1$名詞句も $_2$名詞句も 1 語から成る場合には、$_2$名詞句が前置されている例がほとんどを占めている。$_1$名詞句が 1 語で $_2$名詞句が 2 語の場合も、$_1$名詞句も $_2$名詞句も 1 語の場合ほどではないが、$_2$名詞句を前置する例が圧倒的に多く、約 8 割を占めている。$_1$名詞句が 1 語で $_2$名詞句が 3 語の場合には、語順が逆転し、$_2$名詞句を後置する例が 3 分の 2 を占めるようになる。$_2$名詞句が長くなるほど、$_2$名詞句を後置する傾向が強まっている。

$_1$名詞句が複数語で $_2$名詞句が 1 語の場合には、約 7 割の例が、$_2$名詞句を $_1$名詞の直前に置く配列を示しており、約 2 割の例が、$_2$名詞句を後置している。

$_1$名詞句も $_2$名詞句も複数語から成る場合には、それぞれの名詞句の構成語数に

---

[33]形容詞・副詞の最上級を強める allero は、al の部分属格に由来するが、付加語としての機能を失い、副詞的に機能しているので、本稿では考察の対象から外している。古高ドイツ語 Isidor で該当するのは、次の 1 例のみである。

allero odhmuodigosto (humillimus) (418)

allero は、最上級の前に置かれている。

関わらず、$_2$名詞句を後置する例が大半で、8割を占めている。$_1$名詞句が1語の場合には、$_2$名詞句の語数により語順の傾向が変わっていたが、それとは差異が認められる。

$_1$名詞句と$_2$名詞句と$_3$名詞句から成る3層構造では、$_2$名詞句と$_3$名詞句の間には、$_1$名詞句と$_2$名詞句のみから成る2層構造において両名詞句間に見られたのと同様の語順傾向があるようである。$_1$名詞句と$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句の位置関係については、それぞれが何語から成っていようと、大半の例で$_1$名詞句が前置されている。この傾向は、$_1$名詞句が1語で$_2$名詞句 ＋$_3$名詞句が2語の場合にもはっきり現れており、$_1$名詞句が1語、$_2$名詞句が2語から成る2層構造の場合とは差異が現れている。

規定詞の有無と語順の関係を見てみると、属格名詞句が定冠詞、所有代名詞、所有代名詞と同機能の人称代名詞属格のいずれかを持つ時には、属格名詞句は、被修飾名詞句の前後いずれかに置かれ、被修飾名詞句の名詞とその他の語の間に挿入されている例は見られない。ただし、属格名詞句の規定詞が al の時は、この位置に置かれることがある。

冒頭で述べたように、被修飾名詞句が冠詞を持っている時には、冠詞を持つ属格名詞句は被修飾名詞句中には挿入されないとされているが[34]、古高ドイツ語 Isidor の場合には、被修飾名詞句が規定詞を持っていようが持っていまいが、属格名詞句が定冠詞[35]を持っている時には、被修飾名詞句中に挿入されていないし、また、属格名詞句の規定詞も定冠詞に限らず、上述の規定詞を持っている時には同様に、その位置に置かれていない。

古高ドイツ語 Isidor ではまた、被修飾名詞句が定冠詞、指示代名詞、所有代名詞、数詞の ein のいずれかを伴っている時には、属格名詞句は、被修飾名詞句の前に置かれていない。属格名詞句が被修飾名詞句の前に置かれている例は、すべて被修飾名詞句が規定詞を伴っていない。

被修飾名詞句と属格名詞句が共に上述の規定詞を持つ場合には、常に属格名詞

---

[34]「古高ドイツ語 Isidor における属格付加語の位置(1)」の33ページにおいて、「属格名詞句は、しばしば被修飾名詞とその定冠詞の間に入る。ただし、属格名詞句が定冠詞を持っている時には、この位置には置けない。」ということが言われていると記したが、これは「属格名詞句は、しばしば被修飾名詞とその冠詞の間に入る。ただし、属格名詞句が冠詞を持っている時には、この位置には置けない。」と訂正する（定冠詞を冠詞に訂正）。なお、これは Dal (1966) の97ページと181ページの記述に基づいたものだが、Dal (1966) はこれを中高ドイツ語期に入ってもなお見ることのできる語順のタイプ及びその使用上の制限としてあげており、特に古高ドイツ語初期においてのみ見られるものとしてあげているわけではない。

属格名詞句の規定詞の有無と語順との関係については、Schrodt (2004) も、定冠詞（指示代名詞）と名詞が形成する枠構造に関して記述している箇所で、„Ein Genitivattribut mit Bestimmungswort wird ausgeklammert.“ と述べている（23ページ）。ein Genitivattribut mit Artikel ではなく、ein Genitivattribut mit Bestimmungswort という条件になっているが、Bestimmungswort が正確に何を指すかは説明が無い。

[35]古高ドイツ語 Isidor には、不定冠詞の用例は無い。

句が後置されている。これは、属格名詞句中に規定詞が存在していると属格名詞句が被修飾名詞句中に挿入されず、被修飾名詞句中に規定詞が存在していると属格名詞句が被修飾名詞句の前に置かれないとすると、唯一残された可能性であり、必然的な結果と言うことができる。

指示代名詞は、名詞を伴って用いられることもあれば、名詞を伴わずに独立的に用いられることもある。よってその属格も、属格名詞句の規定詞（定冠詞）になっていることもあれば、それ1語で属格名詞句を形成していることもある。後者の場合は、もちろん規定詞ではない。しかしながら、独立的に用いられているdhesの位置にも、dhesが規定詞（定冠詞）として用いられている属格名詞句と同様の制限が働いているように思われる。そうだとすると、siniu zeihhan dhes (439)におけるdhesの後置は、単に唯一可能な位置にdhesが置かれているに過ぎないということになる。

参考文献

Behaghel, Otto: Deutsche Syntax. Band IV, Heidelberg 1932.

Dal, Ingerid: Kurze deutsche Syntax. 3., verbesserte Auflage. Tübingen 1966.

Eggers, Hans: Vollständiges lateinisch-althochdeutsches Wörterbuch zur althochdeutschen Isidor-Übersetzungen. Berlin 1960.

Paul, Hermann: Deutsche Grammatik III. Tübingen 1968 (1919) .

Schrodt, Richard: Althochdeutsche Grammatik II. Tübingen 2004.

テクスト

Eggers, Hans (Hrg.) : Der althochdeutsche Isidor. Altdeutsche Textbibliothek Nr. 63. Tübingen 1964.